

## 質の高い大学教育推進プログラム 実施状況報告書

大 学 等 名	京都造形芸術大学		
取 組 名 称	頭と手を動かすワークショップ型初年次教育		
申 請 区 分	教育課程の工夫改善を主とする取り組み		
取 組 期 間	平成 20 年度 ～ 平成 22 年度 (3 年間)		
取 組 学 部 等	芸術学部	取組担当者	大野木啓人
W e b サイト	<a href="http://www.kyoto-art.ac.jp/art/special/culture.html">http://www.kyoto-art.ac.jp/art/special/culture.html</a>		
取 組 の 概 要	<p>芸術学部 1 年次生全員が対象の初年次教育であり、頭と手をバランスよく動かすワークショップ型授業により、芸術の専門教育を受ける基盤形成を目指している。カリキュラムは、前期月曜 1～4 講時と 9 月の約半月間集中の 2 つのワークショップ科目からなり、学科を越えて様々な体験ができるよう、学科をシャッフルしたクラス編成としている。授業運営には担当教員の他、ティーチングマネージャーを配し F D に取り組むとともに、2 年次以上の学生と協同した運営により学習者の立場に立った教育の実現を図っている。</p>		

### 1. 取組の実施状況等

#### ①取組の実施状況 【1 ページ以内】

(1)取組の実施体制 (マネジメント体制、教職員の体制、大学としての支援体制)  
 授業運営には、各クラス 1 名ずつクラス担当教員と上級生を学生サポーターとして配置して、指導、学習サポート、授業終了後の振り返りのほか、次回授業に向けた準備を行なっている。さらに 6 クラスに 1 名を基準として、F D 推進の役割を担うティーチングマネージャーを配置している。ティーチングマネージャーは授業時に各クラスを巡回して実施状況を把握し、クラス担当教員やサポーターの相談に乗りアドバイスを与えるとともに、教授法や運営方法の改善点について話し合うためのミーティングを行なっている。ティーチングマネージャー同士も常に情報交換を行ない、日常的に全クラスの授業の質の向上に取り組む体制となっている。

芸術学部長が本取組の責任者となり、新たなワークショッププログラムの開発支援や安全管理の徹底など、全学的なバックアップ体制をとっている。

#### (2)取組の実施計画に掲げた内容 (①取組の全体スケジュール及び各年次の実施計画、②取組に参加する教職員と学生の数等)

本取組の構成は、「ベーシックワークショップ」(前期月曜日 4 講時連続)と「グループワークショップ」(9 月に約半月間の集中開講)の 2 科目からなるカリキュラムで、入学から 9 月末までの間に集中的に実施している。

ベーシックワークショップは、約 30 本のワークショップの中からクラスごとに 10 数本のプログラムを選び、頭と手をバランスよく動かすプログラムとなるよう設計している。7 月にはグループワークショップで制作するねぶたのテーマや原案を考え、模型を作成して、9 月に実際のねぶた製作に取り組む。後期は次年度のプログラム開発及び新年度のためのトライアル授業により実際の授業に先行した試験的運営を行なっている。

本プログラムには 2007 年度から 2010 年度までの 4 年間に、学生 3103 名、クラス担当教員 92 名、サポーター学生 92 名が関わり、2011 年度も 823 名の学生が受講している。

#### (3)社会への情報提供活動 (Web サイト、新聞、テレビ等のマスコミの活用等)

各クラスに 1 名ずつ配置されている学生サポーターは、授業時の補助業務だけでなくブログ (Web) へ書き込みなども行なっている。ブログではクラス担当教員やサポーターにより記録・報告された内容を広く外部にも公開しており、誰でも閲覧が可能となっている。

グループワークショップにて制作した「ねぶた」は、毎年新聞等で取り上げられており、2010 年度からは学園祭と期間をあわせて展示したことにより、より多くのメディアの取材を受けることとなった。

## ②. 取組の成果 【1 ページ以内】

(1) 教育内容の質的向上（教育力向上）につながったプロセスと成果について  
①- (1) で記した教員体制に加え、全クラス担当教員による意見交換会を定期的  
に開催している。各プログラムの改善点を共有して他クラスへ引き継ぐこと、また、  
授業のアーカイブ資料映像や、経験豊富な教員が作成した指導要領（プログラムの  
趣旨、事前準備、導入から終了までの流れとタイムスケジュール、注意点等を記載）  
を元に教育手法を全教員で共有して、指導力向上をはかっている。  
一連の取り組みには、大学FD活動の一環として、各学科の専任教員が1名ずつク  
ラス担当教員として配置されており、幅広いワークショップ型授業の教員として指  
導することで、各教員の教育手法が共有化され、相互扶助的に教育力向上に役立て  
られている。

(2) 具体的・客観的に成果が分かるデータについて  
ベーシックワークショップでは、実施日ごとに各ワークショッププログラムの評価や  
学生の満足度、達成感を検証するために「ふりかえりシート」を配付・回収し、各プ  
ログラムの教育効果の測定と課題の抽出・改善を図っている。ふりかえりシートは、  
授業終了後にクラス担当教員と学生サポーターがチェックし、学生ごとの取り組みの  
様子や運営の振り返りにも役立てている。  
各授業では最終回に授業評価アンケートにより、クラスごとの教育の質を定量評価し  
測定している。2011年3月には学生の成長を測る目的で授業とは別に全学年を対象と  
した満足度調査を実施し、1年次～4年次の在学生全員から約8割の回答を得ること  
ができた。満足度調査の結果ではワークショップに対する「面白さ」の評価は各学年  
でも変わらないが、「成長度」は1年次が特に高く評価しており、初年次教育として  
授業改善を行なってきた結果があらわれたものと言える。

	1年	2年	3年	4年
面白さ	2.87	2.90	2.80	2.79
成長度	<b>2.95</b>	2.87	2.74	2.78

※評価を1～4点で採点、1：想像以上に悪い～4：想像以上にいい、中間値は2.5

(3) 本取組を実施した結果、本取組が学内外に与えた波及効果（教育改革の実績、  
教職員の意識改革、教育環境の改善等）や、地域・企業から得た評価について  
地域の住民やコミュニティ、教育機関等から共同事業の依頼を受けた取り組みが始ま  
っている。2011年度は上賀茂神社での「賀茂観月祭」と時期をあわせて、グループワ  
ークショップで製作したねぶたの神社境内での展示を計画している。北山商店街、賀  
茂葵コミュニティ、地元地域の方とともに、葵の形をした小さなねぶたを製作するワ  
ークショップも開催する予定としている。大宮小学校からは6年生を対象にねぶたワ  
ークショップが依頼されるなど、本学の教育手法やその成果に触れた地元地域の方か  
ら、この取組を評価していただき、活動を地元でも開催してほしいといった希望の声  
につながっている。

### ③. 評価及び改善・充実への取組 【1ページ以内】

(1) 評価・改善体制の構築と機能について(取組の達成度や成果測定方法や指標)取組の評価・改善体制として、初年度よりベーシックワークショップの実施日ごとに「ふりかえりシート」を配付・回収し、各ワークショッププログラムの評価や学生の満足度、達成感の検証と、教育効果の測定、課題の抽出・改善を図っている。

取組の成果をあげるには、内容、実施方法、評価方法等取組を構成するあらゆる項目において、学習者の立場に立った検証がなされることが重要であるため、1年生として授業を受けた経験のある上級生を学生サポーターとして配置して、1年生と年齢や立場の近い学生の目線から検証することで、次年度に向けた改善へとつなげている。毎年実施される教科書改訂の際にも上級生が重要な役割を担い、教科書に掲載するプログラムの選定の際には、目的が理解できるか、興味が感じられるか等、上級生たちの意見を重視しており、上級生たちが中心となってデザインや編集も担当している。プログラムの中には学生ごとにプレゼンテーションの時間を設け、取り組みの達成度や学習成果を測る評価指標のひとつとしている。本取組で行なうワークショップ型授業は、考えたことを形にし、形になったものを見てまた考えるという芸術活動の基本をおさえた内容のため、集団活動の中で各々の役割分担やかかわり方を随時チェックするための4項目(身体性、創造力、社会性、技術力)を設けている。

また、授業内容や指導方法を共有化するため、2009年度より授業の進行や指導の様子を映像で記録するアーカイブ資料の作成を推進している。ワークショップ型授業の経験がない教員や新任教員であっても、アーカイブ資料を事前に参照して授業に臨むことで具体的な授業イメージを持ち一定の精度で指導にあたることができる。

#### (2) 認証評価を受けている場合の内容、外部機関の評価

大学認証評価においては、

「芸術を社会に活かすことのできる人材の育成」を目的として、学科を横断したワークショップを初年次教育に設定し、専門教育を受容する基盤形成と学習動機の喚起を体験型教育で実施している。

との評価を受けている。狭い芸術の枠組みに留まることなく積極的に社会に出て行く環境を整えながら目標の達成を図り、学部の教育の質の維持、向上を図るため、芸術に必要な基礎力と社会性を育成することを目的としている本取組が、専門教育の基盤形成と学習の動機付けを行なうプログラムとして、高評価を受けているものといえる。

瀬戸内国際芸術祭 2010 では「高松うみあかりプロジェクト」あかり制作指導として、ねぶた制作を経験した学生たちが高松市であかりの制作方法を指導した。2010年9月1～10日に大正大学で行なわれたねぶた制作には、本学が実践指導を協力し、グループ制作から得られる達成感や協同作業に必要なチームワークやコミュニケーション力を伝える機会となった。他府県の機関から要請を受けた活動であり、一連のワークショッププログラムが教育効果の狙いの上でも期待された取組であることが窺える。

#### ④. 財政支援期間終了後の取組 【1ページ以内】

##### (1) 財政支援期間終了後の取組実施について（体制や財政措置等）

本取組を導入した初年度から、運営に必要な経費は2つのワークショップ科目が所属する芸術教養教育センターの予算として支出される仕組みを採っている。そのため財政支援期間終了後も大幅なプログラム変更や支出項目の見直しは行なわず、引き続き継続する見込みである。

2012年度以降の運営については、次年度教育計画を策定する10月末をめどに、次年度の運営体制や必要経費を試算したうえで実施に向け検討を進める予定である。

##### (2) 教育の質的向上に向けた改善・充実の計画

学生たちが芸術を学ぶため学習動機や目的意識を各自のうちに持つことに気づくという点で、入学前教育と初年次教育の目的には共通する部分が多い。本学では多様な入試を実施しており、「コミュニケーション入学」というアドミッション・オフィス型入試の合格者に対しては、共通課題、専門課題、登学日を設定し入学までに身に付けてほしい事項を継続的に指導する「入学前学習プログラム」を既に実施している。今後は既に行なっている新年度のための「トライアル授業」を充実させ入学前教育と重ねて計画・実施することにより「入学前から初年次までを対象とするプログラム」へと発展させることをめざしている。

2つのワークショップ科目は、専門科目を受容する基盤形成と学習動機の喚起が狙いであるが、次のステップとしてワークショップ型授業の意図を考えるプログラム開発を行なう予定である。1～4年次の学生が各自適当な時期に「こと」作りからテーマを見つけて考えてゆくことで、ワークショップ型授業の意図するものをそれぞれ自らが導き出し、アートと社会の役割を結び付けることを目標とするものである。

##### (3) 継続実施するにあたっての課題及び問題点

グループワークショップ終了後は、学内展示の後に制作物を解体しており、毎年大量に破棄される廃棄物が問題となっている。基本構造体が再利用できないか、また、再利用可能なもので制作することなどの検討が今後の課題となっている。

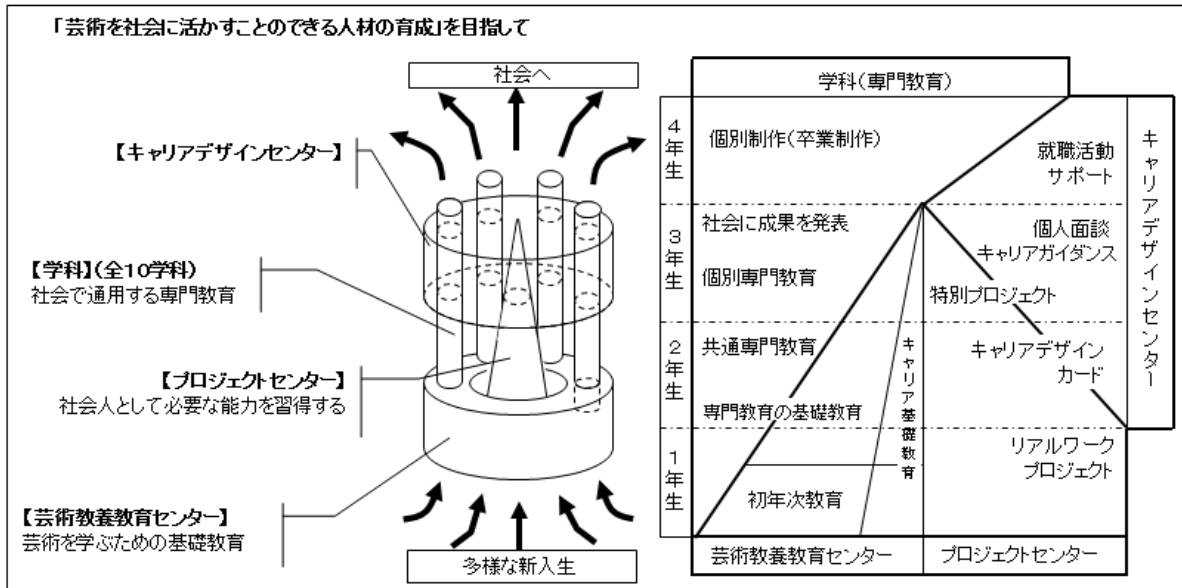
2つのワークショップ型授業はいずれのプログラムも長時間に及ぶ共同制作時間のため、体調をくずす学生が出てきている。学生には各自での体調管理を徹底しているが、特に6月以降は猛暑の中制作する場面も多くなり、1日単位で行なわれる長時間の作業量、活動量について、検討が必要な課題となっている。

また、集団制作に適応しづらい学生も見受けられる。1年次生全員が本プログラムを履修するため、取組を継続するにあたって特異な個性を持つ学生へのフォローも継続して検討する必要がある。

教育の質的向上だけでなく、サステイナブルな教育活動を行なうための検証、検討が必要となっている。

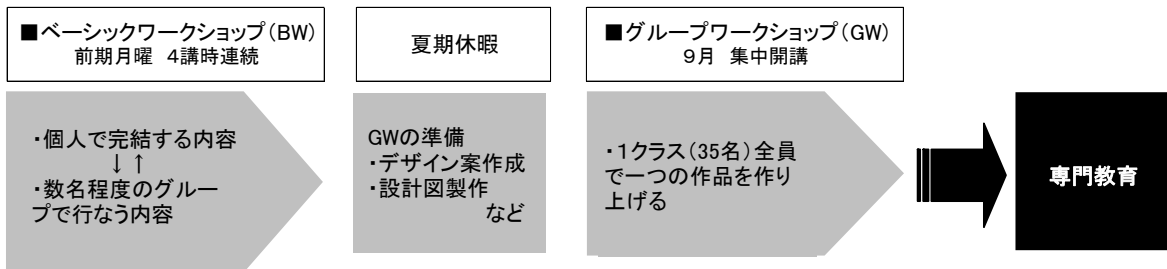
## 2. 取組の全体像 【1ページ以内】

### (1) 本学の教育課程の全体像



### (2) 2つのワークショップ科目の流れ

#### 【ベーシックワークショップ・グループワークショップの流れ】



### (3) 運営体制

